海外で心に残った記憶と背景

（カナダ編）

2023 年 11 月記　松村　眞

はじめに

外国を訪問すると、予期しない体験をして驚いたり感心したりすることがある。見聞きして面白く思うこともあれば違和感を覚えることもある。日本を訪れた外国人と接しても同様で、その時の記憶は時が経っても容易に忘れない。意図的な結果ではないから他人に伝える機会は少ないが、印象が強いのでその後の参考になることも多い。本稿ではカナダで経験し見聞きした驚きや違和感について、事例の状況と考えられる背景を紹介する。

北米環境会議（Globe1998）参加（1998 年 10 月）

（バンクーバー・ビクトリア・バンフ・カルガリー・モントリオール）

1997 年にカナダ大使館から、北米地区で最大の環境・エネルギー会議「Globe 1998」への参加と発表を要請された。会議と並行して展示会も開催され、欧米諸国が中心だが日本の企業も環境関連技術や設備を展示することになっていた。会場はバンクーバーのカナダプレースでホテルが隣接していた。会議といってもシポジウム形式で、私と環境装置メーカーの数名が日本の環境対策と技術を紹介した。この会議はカナダ政府が強力に支援していたので、カナダ大使館が日程の調整や宿泊の手配をしてくれた。大きなイベントなので、私はビジネスに展開できる技術情報の入手を期待していた。しかし、発表や展示は土壌汚染の対策技術が圧倒的に多く、私が期待していた産業関連技術が少なかった。北米地域で土壌汚染が問題になっていることは知っていたが、これほど大きな関心を集めているとは予想していなかった。

カナダプレース

北米地区の土壌汚染は 2 種類だった。一つは工場跡地に残留する有害物質による汚染で、住宅地として分譲された地区で健康被害が発生していた。このため用地転用に際して土壌の健全性確認と、汚染が確認された場合は関係者に修復を義務づける法案が成立していた。

しかし健全性の確認には、広範なボーリング調査や化学的な分析が必要である。このため調査方法や技術が注目を集めていた。また汚染土壌の修復には化学処理や熱処理が必要なので、ビジネスとして展開しようとする企業が提供できる無害化処理技術を紹介していた。

もう一つの土壌汚染はガソリンスタンドなど石油燃料の貯蔵施設で、タンクから漏れた燃料が周辺の土壌を汚染していた。北米地区の石油燃料貯蔵は、長い間、タンクを地下に直接埋設する方法だった。このため古くなったタンクが錆びて、燃料が地中に漏れ出ていたのである。そんな跡地の汚染を修復するにはブルドーザーで汚染土壌を掻き出し、浸み込んでいる燃料を焼却するか化学的に分解する必要があった。後日のことだが、このときに知り合ったカナダの土壌汚染修復会社が、日本で事業を展開する目的で日揮に資本と技術の提携を提案してきた。良心的な会社で実績が豊富だったし、来社した担当者には好感がもてた。しかし私は日本では土壌汚染修復事業が成立しないと説明し、提携の提案を受け入れなかった。

日本は北米に比べると工場の売買が非常に少なく、多くの場合、経営が代々引き継がれている。このため、通常は安易に有害物質を敷地に放置したりしないからである。仮に古い工場で過去に汚染があっても、売買が少ないから容易に顕在化しないであろう。また日本の石油燃料施設は、貯蔵タンクを地下に埋設せずにコンクリート製の地下ピットに設置している。このため定期的な漏洩点検が容易なのである。それに北米より新しい施設が多いから、錆びて石油が漏れた事例は聞いたことがなかった。

実はカナダの会社より前に、関連会社の社長から汚染土壌修復事業の打診があり、そのときにも同じ判断を示して事業の誘いに乗らなかった。その社長は非常に積極的だったから、私に判断の根拠を厳しく求めてきて困惑した。しかし何回もていねいに説明して納得してもらった。環境分野は技術も事業も確立していない場合が多いから、ビジネスチャンスや新技術を見逃すわけにはいかない。しかし自分でよく調べ、よく考えて判断しないと損失を被る危険性があると思っていた。

会議が終了した翌日が休日だったので、バンクーバーから船で数時間のビクトリアに行った。ビクトリアはバンクーバー島の南端にあり、大陸側との間に幅の狭いジョージア海峡がある。1700 年代は先住民族の居留地だったが、1849 年にイギリスの植民地になった。その後、1858 年に金鉱が発見されて金の供給基地になり、1871 年にカナダ自治領になった。現在はブリティッシュコロンビア州の州都で人口は約 34 万人である。別名「ガーデンシティ」と呼ばれるように、市内のいたるところに名園があり四季折々の花が咲き乱れている。歴史的な背景から街並みには英国の影響が色濃く残り、港を囲むように美しい遊歩道が整っている。穏やかなインナーハーバーの前には、州議事堂や博物館、フェアモン

ト・エンプレス・ホテルなど由緒ある建築が残されている。

われわれ数人はゆったりとこの街を散策し、有名なブッチャート・ガーデンを訪れた。22 ヘクタールもある広大な庭園だが、地形をうまく利用した植栽が見事で、手入れがいき届いてきれいだった。誰もここが石灰岩の採掘跡とは想像できないだろう。環境問題の一つは鉱山の跡地で、閉山後は見捨てられ荒廃したままの場所が多い。それをここでは見事な庭園に再生したのである。関係者の知恵と努力に感服し、他の鉱山跡地でも参考にして欲しいと思った。

インナーハーバー

フェアモント・エンプレス・ホテル

州議事堂

ブッチャート・ガーデン

バンクーバーに戻った後はロッキー山脈の麓にあるバンフに行き、ここでも現地の技術者と交互に技術情報を紹介し意見交換をした。場所は宿泊施設が併設された研修センターで、別の部屋では学生たちが催し物を開催していた。夜は何もすることがないので、カルガリーで開催されているアイスホッケーを見に行った。アイスホッケーを見るのは初めてだったが観客が非常に多いのに驚いた。雪に覆われた駐車場には数百台の車が集まり、観客席はほぼ満員だった。シュートが入るたびに大きなアナウンスとともに派手な照明がホールを駆け回り、観客が総立ちになって歓声をあげていた。カナダではアイスホッケーが

日本の野球やサッカーに代わる人気スポーツなのである。

次の日はロッキーの真珠といわれるルイーズ湖に案内された。だが水面は完全に凍結しており、周辺や近くの山々は雪に覆われて真っ白だった。好意で案内されたのだが、寒いだけなので早々に引き揚げた。なお、この時は数年後にプライベートで再訪するとは思っていなかった。カルガリーの次はモントリオールに行き、マギル大学の教官たちと意見交換をした。モントリオールはカナダの東側にある人口 380 万人の大都市で、ビジネス・人材・文化・政治の中心地である。モントリオールはフランス語圏で、街の看板も英語よりフランス語が多かった。住民の大半がフランス系のカナダ人だからである。

マギル大学は 1821 年に創立されたカナダ屈指の名門校で、世界大学ランキングでもトップクラスである。環境分野では生態系の研究実績が多いので意見交換が設定されたのだが、私の得意分野ではないのでよくわからなかった。それに資料やパネルがフランス語で、会話も英語よりフランス語が多く困惑した。マギル大学の構内では、細い木の枝がほとんど折れて落下していた。理由はこの年の厳しい寒波で、枝の中の水分が凍結したからだと説明された。滅多にない現象らしいが、こんな現象が起こるのかと不思議な気がした。

カナダディアン・ロッキー観光（2000 年 6 月）

60 才になってサラリーマンを卒業した時、私は時間の三分の一をビジネス活動に、三分の一をボランティアの社会活動に、三分の一を私的な活動に使うことを考えていた。このうちビジネス活動は、実際に適切な機会があるのかどうかが不安だった。しかし幸いにして多様な依頼が続き、三分の一どころか三分の二以上の時間を費やすことになった。社会活動についてはシニアエンジニアの組織を作り、新エネルギーの解説書を出版することができた。一方、私的な活動は一番後回しになっていた。そこでビジネス活動や社会活動が一段落した時期に、カナディアン・ロッキーの観光旅行を楽しんだ。山と森と湖が非常に美しいと聞いていたから、よい季節に行ってみたいと前から思っていたのである。

初日はバンクーバーからカルガリーを経て、ロッキー山脈の麓にあるバンフに入った。カルガリーとバンフは数年前に来ていたが、その時は全面が雪と氷に覆われた世界だった。しかし今回は 6 月だったから、さわやかな夏で快適だった。バンフ地区は森と湖に囲まれた国立公園で、近くにマリリンモンローの映画「帰らざる河」の舞台になったボウ川の清流が流れていた。上流は氷河だから豊富な雪解け水である。川のそばにあるフェアモントホテルは、自然とよく調和したデザインが素晴らしい。見ただけで誰でもこのホテルに滞在し、近辺を散策したいと思うだろう。だが非常に人気の高い五つ星ホテルだから容易に予約を取れない。バンフに滞在した次の日は、旅行会社が手配したミニバスでルイーズ湖、

ペイトレイク、コロンビア大氷原を経てジャスパーまでドライブした。

ルイーズ湖はロッキーの真珠といわれ、遠くの氷河と近場の森林が一体となって、いつまで見ても飽きない美しさだった。ここでも数日は滞在したいと思った。同じ思いの客が多いのだろう、大きく立派なホテルが湖畔に立っていた。ペイトレイクは高い場所から見下ろしただけだが、独特の緑色をした湖で強い印象が残った。どうしてあんな色になるのだろうと不思議な気がした。コロンビア大氷原は 300 平方キロメートル以上の広さで、北極圏を除けば地球最大規模の大氷原である。氷の厚さは最も厚いところで 300 メートルを超える。観光客が見られるのは、この大氷原から流れ出るいくつかの氷河の一つに過ぎない。駐車場から特殊な雪上車で 4 キロメートルほど氷河を登り、車を降りて付近を歩き回った。足元には随所に小さな流れがあり、少し流れが大きく深い場所では青く透き通った水が見えていた。これが氷河の端で、この上流には広大な大氷原が広がっていることを想像すると、自然の大きさに感嘆するほかなかった。

フェアモントホテル（バンフ）

ルイーズ湖

ペイトレイク

コロンビア大平原

ジャスパーではレンタカーを借りてマリーン湖までドライブし、遊覧船に乗って湖に浮かぶ小さな島スピリット・アイランドまで行った。島では木製の歩道を歩いて、手つかずの自然に包まれた。遊覧船からは山の麓に野生の山羊（マウンテン・ゴート）が群れているのが見えた。ドライブの途中では道路が混んでないのに何度も車列が止まった。その先には角の丸いビックホーン・シープが何頭もいて、観光客が眺めながら写真を撮っていたのである。道路わきの林では大きなへら鹿（ムース）が首を伸ばして木の葉を食べていた。ときには親子連れの熊を数メートルの近さで見たが人を怖れる様子はなかった。ジャスパーのホテルでは、広いベランダの椅子に座って山の向こうに沈む夕日を眺めてくつろいだ。このホテルにはプールがあって、泳いでいる人がいたから私も入ろうとした。でも手を入れたら冷たくて、とても泳ぐ気になれなかった。ときどき思うのだが、西洋人は日本人より冷たい水にも寒い場所にも抵抗力があるように思う。本質的な違いがあるのだろうか。ジャスパーからはエドモントンまでは車で移動し、それからバンクーバーに戻った。

マリーン湖（ジャスパー国立公園）

木の葉を食むへら鹿（ムース）

バンクーバーでは、バラード入り江に突き出た半島の先端にあるスタンレーパークに行った。周囲は約 10 キロメートルで、園内には水族館や動物園があり海に沿ってサイクリングコースが整備されていた。ここでは水族館で白イルカのショーを見物し、自転車を借りて海と船を眺めながらサイクリングを楽しんだ。バラード入り江は静かな内海で、バンクーバー港に近いことから大型客船がよく通った。たぶん数週間のクルーズ船であろう、階数の多い白い豪華客船が海の青によく映えていた。

少し固い話だがバンクーバー港の一角に黄色い人工的な山が見えた。形が整っているので私はもしかしたら硫黄ではないかと思った。そこで後日調べたら、石油精製の副産物として生成する硫黄の粉末とわかった。バンクーバーがあるブリティッシュコロンビア州は、石油資源が豊富で大きな製油所がある。石油には硫黄が含まれているから、通常は製油所に脱硫装置が組み込まれており、硫黄が大量に回収されるのである。この硫黄はバンクーバーから他国に輸出されるのであろう。ちなみに日本では、1970 年頃まで化学原料として

必要な硫黄を硫黄鉱山で採掘していた。太平洋戦争の激戦地だった硫黄島も、硫黄を採掘する目的で作業員が住んでいたのである。岩手県にも大きな硫黄鉱山の跡地が廃墟になって残されている（松尾鉱山)。しかし石油の消費量が大きく増えた結果、今は製油所が硫黄を市場に供給するようになった。このため日本の硫黄鉱山はすべてが閉山し、一部が歴史遺産になっている。

カナダの社会的な背景

① カナダは知名度の高い国だが、人口は約 4000 万人で面積の割には少ない感じがする。国土面積は約 1000 万平方キロメートルでロシアに続く広さだが、北部は人口密度の少ない北極圏である。古くは先住民が居住していたが、英仏両国による植民地化で近代国家に移行し 1931 年に独立が承認された。現在のカナダは過去の歴史的な経緯を経て、政治・経済の両面アメリカとの関係が強い。

② 人の住める地域は総面積に比して少なく、人口密度は 3.2 人/km2 である。大半のカナダ人はアメリカとの国境に沿った約 500 キロメートル幅の地域に住んでおり、それより北は人口が極端に少ない。人口が多いのは五大湖とセントローレンス川周辺である

③ 経済の状況は 20 世紀の初頭まで農業が主体だったが、その後は東部のモントリオールやトロントが金融センターになり、現在では世界有数の先進工業国になっている。工業は自動車産業や機械産業が成長し、近年は IT 産業が発展している。

④ エネルギー資源は天然ガス、褐炭、石炭、原油の産出量が多い。ダイヤモンド資源も多く世界第 6 位の産出量である。金属資源にも非常に恵まれており、ウランが世界シェアの約３割、カリ塩も世界シェアの約３割、 イオウ、鉄鉱石、銀、タングステン、ニッケル、亜鉛、コバルト、鉛、金、アンチモン、銅の産出が多い。

⑤ 人種はヨーロッパ系が 75%、東アジア系と南アジア系が約 10 %である。アメリカに比べると黒人が少なく約 3 %に過ぎない。言語は英語とフランス語が公用語になっており、裁判所、議会、全政府機関が英仏 2 か国語を平等に扱っている。実態は国民の約６割が英語、約 2 割がフランス語を第一言語にしている。公用語以外の話者は中国語が約 100 万人、イタリア語が約 45 万人、ドイツ語が約 44 万人である。

⑥ 印象としては自然環境に恵まれており、各地の森や渓谷が美しく観光資源としての価値が高い。発電に使える河川が多いので、水力発電が電力供給の約 6 割を占めている。ガスや石炭など化石燃料による発電の比率は約 20%に過ぎない。人口に比べてエネルギーも鉱物資源も豊富だから恵まれた国といえるだろう。

海外で心に残った記憶と背景（カナダ編）終わり